

俳句随想〔三百四〕

汀子

最近は様々なイベントが俳句を募集して、入選作品が表彰されるようになって来たことで、俳人は大変忙しくなった。色々な門戸が開かれ、主義主張を異にする人々との交流も盛んになって来た。大きい目、大きい心から見ればいいことである。

我々俳人は昔から精魂込めて作った俳句が、何らかの形で入選し、本などに掲載されるのをただ純粹な喜びとして来た。しかし現状を見ると入賞するための当て込みの句が非常に多くなっているように思う。「平明にして余韻の深い句」が目立たないということで、作る人が内容的に面白さを求めた句に営々となつていっているように思えてならないのは残念である。

自分のどのような俳句が、どのような形で入賞するかは実は非常に大切なことで、その人の俳句の将来を決めると言っても過言ではない。

只事の俳句がよいと言っているのではない。平凡ではない平明についてこれから皆さんと共に考えて行こうではありませんか。

旬日記 汀子

平成十八年十月一日 東海ホトギス俳句大会
雨上り更に露けき順路かな
薄紅葉徳川園といふ静寂
十月二日 ロイヤル俳優
稲庭万葉人となり通る
降る雨も名所の紅葉促せり
一塊の赤一塊の蔓珠沙華
十月六日 お月見句会
東京の雨抜けて来し月今宵
名月の照らされて道迷ひけり
十月七日 芦屋ホトギス会
雨も又過客なりけりいざよへる
十六夜や昨日の晴をつなぎたく
十月八日 九州ホトギス同人会
酢造りの噴く一つづつ口を抱き
火の山の噴く秋天を驚かせ
太陽を抱き酢造りの一千壺
火の山の威容露けく峙てり
火の山の稜線峨々と冷まじや
秋天に嵌めて虚子句碑年尾句碑
十月九日 第二句会
噴煙を上げて露けき夜の帳
月待うて居待の家路辿らばや
立待の月に遅れて乾杯す
火の山を消して秋声渡る關
十月十日 大阪倶楽部
夜々月の名を得て旅路果てにけり
臥待の月にやうやく家居かな
快晴の旅秋風を身ほとりに
旅疲れ臥しても待てぬ月とこそ
瓢の実の誰吹くとなく置かれあり
色鳥の庭と書齋をへだつ玻璃

寝て待つといふは月の出なりしこと
留守がちの仕事溜りぬそぞろ寒
夜々月の今宵は寝待なりしこと
十月十二日 清交社
仕残せし仕事忘れて秋高し
目栗の落ちつつ音と気づくまで
十月十三日 工業倶楽部
薄紅葉旅路彩りはじめけり
十月十四日 西の虚子忌
横川路の木洩日さへも露けしや
吸ひ込まれさうな露寒漲りぬ
薄紅葉よれカウプして濃紅葉へ
十月十五日 関西野分会
しまはれて案山子の役目終りけり
朝鳴いて狹庭を統べてをりにけり
朝の間の鵬の高音でありにけり
限りなき空を区切りて鵬高音
目鼻なき案山子まなざしあることを
十月十五日 下萌句会
快晴の広き空あり椋鳥来る
柿むく手原稿書くと手別にあり
朝寒の木洩日ふやす枝を剪る
朝寒の木洩日ふやす枝を剪る
小鳥来て別の小鳥に加はりぬ
十月十七日 有恒倶楽部
朝の窓閉めて露寒へだてけり
一日に一度出て見る菊の庭
書齋先づ整理整頓冬支度
供華に又小菊選んでしまひけり
庭師来て庭にはじまる冬支度
見えてくるまで露寒の星仰ぐ
刻々の過ぎゆく時間露寒し
十月十七日 無名会
彩りの今日がありけり秋山路
朝寒をいとふことなく早出して

目覚めよき朝の寒さでありしかな
快晴といふ朝寒のありにけり
山荘の秋を訪はんと思ふ日より
今日よりは朝の寒さに心して
もう人の訪はぬ山家の秋なりし
十月十八日 夏潮句会
返事書くすべなきことも露寒し
俳諧に心遊ばせ宗鑑
来ては去る小鳥の所在あるがま
お隣へ結界はなし小鳥来る
宵闇の今宵灯さんシャンデリア
読み終へて露の命の便り置く
十月十九日 クラブ合同
秋声の餌となりて風の音
くつるげば蜜柑を剥いてをりし指
十月十九日 きさらぎ会
末枯るるものより日差配らるる
十月二十一日 ホトギス社吟行会
アトリエといふ遺されし露の館
龍子記念館の末枯とは風情
坂登りつめて露けき茅舎の碑
快晴に誘はれて露け行く露の坂
君癒えよ露の祈りを届けたく
十月二十六日 年尾忌
遺されしこと守りゆかん年尾の忌
虚子百句もて年尾忌を修したる
十月二十七日 時雨句会
秋時雨雲の走つてをりにけり
菊活心の昨二三種類にはとどまらず
忌心の昨日につづく菊日和
十月二十八日 句会と講演の会
まだつゞく滞在五日菊日和
草の架飛ばすほかなき抜け道を
菊の香を残して鉢を移しけり
抱へ来し仕事はかどる菊日和
十月三十日 野分会
暮れてゆく案山子はいよよ紛れけり
鵬の賛その正体の乾きをり

廣太郎句帳

廣太郎

平成十八年十月一日 東海ホトギス俳句大会

澄む水に波紋乱れてをらざりし萩の花霽留めて揺れにけり高さうな鯉を沈めて水澄めり

十月二日 はせを句会

秋霖の芝公園といふ一会馬肥ゆる君の存問受けてより色鳥のための大樹でありにけり

十月四日 一水会

来年のためにもみづる桜かな秋の川水綻んでをりにけり一周忌知るや白萩色極め

十月五日 蕉心会

秋霖や君への涙雨かとも渡り鳥芥のごとく波に揺れ紅に秋を感じてゐる都心

白萩に私負けたわ好きにして新走供へ忌明けの席となる

童胆や一周忌てふ俳に白は揺れ紅はこぼれて乱れ萩

十月七日 日本伝統俳句協会関東支部大会

落鮎の姿に焼かれたる衷れ水歪むより落鮎の色となる

下り築水と存問してをりぬ落鮎に航空母艦めく傾斜

落鮎の香り残して果てにけり

十月八、九日 九州ホトギス同人会 大会

雲の上に鷹遊ばせて空の黙山襲の仔細を明かし秋日濃し秋風の句碑秋風に磨かれて

葛の花句碑句やかに彩れり噴煙も加へ百態秋の雲

Kさんの句碑は素通り爽やかに立つて待つ月の余韻でありにけり

カクテルの水は爽やかに弾けセリーグもパリーグも露けき結果

城山の哀史の色に粧へり

十月十日 土筆会

錆鮎に炭の怒つてをりにけり紅葉して山の恥ぢらひありにけり秋声を虚子の教へと聞く薩摩

火の山といふ秋声の置きどころ

十月十四日 西の虚子忌

歳月に露けき別れ重ねつつ爽やかな西の忌として語らばや峰寺といふ露けさを置く忌日

十月十六日 小島春蘭樓 多田薫様句集序句

肥前より花鳥の心天高し蜻蛉の空赤々と句集生る

十月十七日 草木瓜会

榎榎の実年尾を偲ぶ色に熟れ取穫を終へ稲城野の秋の声

天帝と対話してゐる秋の声

秋の声生あるものの祈りとも榎榎落つ音も読経に加はりて

秋の声多摩の稜線越えて満つ

榎榎の実熟れて忌日の寺となる

十月十九日 登高会

帰宅するまでが運動会でありコンクリートジャングル木の実ドスと落つ万国旗あの国あらず運動会

秋晴に新幹線の突つ込めり秋晴を使ひ切つたる噴火かな

十月二十一日 ホトギス社吟行会

龍子の世灯下親しく引き寄せし爽やかや皆が文士となる集ひ

十月二十四日 若水句会

武士の面構へなる蝗かな蝗食ふ舌が震へてをりにけり一事終へ残りの菊となりゆけり

大河とはなれずに秋の芦屋川

十月二十五日 目黒学園句会

濁酒心濁つてをらざりし江戸前の口して走り蕎麦吸る身に入むやもうプロ野球見てません

どびろくの色を雅と酌む漢

昂りし手に新蕎麦の打たれけり

俳磚の故人身に入む数となり

十月二十六日 年尾忌

忌心を秋 明菊の白に置く忌心を西へ運びし秋の雲

十月二十八日 ホトギス社句会

菊日和 続続自然から学ぶ後の月仰げば虚子の笑顔かな

零余子選る指が躍つてをりにけり

風流を説きし虚子の座十三夜

零余子てふ蔓の先なる天地かな

雑詠

廣太郎 選

微睡みしウイーンの森の囀に 仙台 小島左京
 青い鳥赤い鳥ゐて囀れり 同
 教会は森の借景囀に 同
 戻り来ぬ登山日記と亡骸と 徳島 多田まさ子
 空港に迎へし遺体春時雨 同
 引く波に面影を追ひ春惜む 同
 掌にうけよ三代句碑に花の散る たつの 浅井青陽子
 残りゐる鴨に親しみ高瀬川 同
 白木蓮咲き初む主なき狭庭 同
 不許葦酒あぢさゐ寺の入口に 福岡 松尾緑富
 供養塔めぐる山内あぢさゐに 同
 石塔群あぢさゐ見つゝ山路来て 同
 香にむせて脳の痺れし栗の花 榎原 稲岡 長
 玄室を見守る墓木朴の花 同
 開き初む泰山木の無垢の白 同
 遊船に一番乗りの女かな 神戸 山田弘子
 一等星いたたく夜の新樹の香 同
 左より右手疲れてゐる薄暑 同

更衣みどりに染まりやすくなり 東京 内藤呈念
 自分でもうるさからうに行々子 同
 ため息のごと吹き出されしやぼん玉 同
 水光るところ見え来て水芭蕉 熱海 嶋田一步
 青芒風の自由を受けとめし 同
 桃の花咲いて遠くも咲いてゐし 同
 あやめ立つ一本づつの姿勢持ち 同
 飛機の過ぐ刻ある照らす干蒲団 同
 神は色惜しみて咲かせ桐の花 同
 磴登る山鶯にはげまされ 長岡 安原 葉
 遠足や腕白の子も疲れしか 同
 糸遊に仏塔少しゆがみけり 同
 でで虫に時間溜つてをりにけり 大阪 塙 告冬
 万緑に目つぶれば太陽の音 同
 サングラスかけて鏡にものを言ふ 同
 雫して下闇青空をこぼす 八尾 岩垣子鹿
 指先を高く集めて朴の花 同
 紫陽花は六甲が好き寺が好き 同
 崩れんとして牡丹のさゆらげり 神戸 長山あや
 遙かよりたましひを呼ぶ祭笛 同
 つんと来てほろと親しき山葵かな 同
 名に負ふも人の世のこと姫女苑 香川 湯川 雅
 糸とんぼ風の繊維となつてをり 同
 牛蛙池眠さうにしてしまふ 同

雑詠句評（九月号より）

葉 ・ 中 正・千鶴子

むつみ・憲 明・保 佳

とほ歩・眞理子・芳 子

静 龍・美 奇・廣太郎

春潮に地震の昂り残る能登 金沢 藤浦昭代

春潮は文字通り春の潮のことであるが、敢えてその特色をいえば、潮の色がしだいに淡い藍にvari明るい感じになつてくると、また潮の干満の差が著しいことである。この句は、三月二十五日に起きた能登半島地震の後の春潮の能登を詠んだ句で、度重ねて襲う余震の大地と春潮の相が見事に詠みとられている。春潮に地震の昂り残る、と見た感性がすばらしい。（葉）

平成十九年三月二十五日に起こった能登半島の地震である。ホトトギス誌友も被災され、何よりも作者が代表をされている俳誌「あらつみ」の方々はより多く被災されたのではないだろうか。

季題に託して、この未曾有の災害を平明に詠んでおられるが、地震の恐ろしさが秘められている。（廣太郎）

六甲の霞に乗つてゐる書齋 神戸 山田弘子

霞に乗っている書齋とは、いかにも雄大で高雅。白雲に乗って遊ぶ仙人のようでもあり、密かに自足する隱者のようでもある。竹林の七賢ではないが、古来、学問も詩も、ましてや誹諧は、世間無用のもの。そう思い定め、俗塵を離れて遊ぶところに、文学が生まれる。雲にも近い六甲とある山荘の書齋に座して、ひととき心の塵を払っている作者である。

書齋に座すひとときの大切さ、学問や詩に心遊ばせるこの時間の大切さをしみじみと述べる。幽境に遊び、こころは自ずからミューズ神へと化していく。日頃はいかに多忙でも、心にはいつもこの豊かな世界をもっていたいと願う作者である。（中正）

お住まいの神戸の高台の情景であろう。筆者も、故郷の山である「六甲山」には一際愛着を持つている。人それぞれ故郷の山には愛着を持つものであるが、実際住んでいる人は尚更ではないだろうか。日常身近に感じている山のその日の情景が季題を通して雄弁に語られている。（廣太郎）

天地有情

江子選

鯉跳ねて落花一片誘へり 東京 稲畑廣太郎
 桜もう来年が始まつてゐる 同
 松が枝も落花とどめてをりにけり 長岡 安原 葉
 堂裏を明るうしたる濃山吹 同
 十余年余計に生きて椿寿忌に たつの 浅井青陽子
 生涯の小城下住まひ春の逝く 同
 共に齡とる愉しさよ庭若葉 神戸 山田弘子
 空腹もよし新緑の風美味し 同
 葱坊主直立かなしからざるや 熊本 岩岡中正
 うなじ吹かれて行春を惜みけり 同
 ホ句涼し一語消ゆれば一語生れ 神戸 後藤比奈夫
 クリスマスローズ日本語使ひたく 同
 わが齡には及ばねど大牡丹 徳島 上崎暮潮
 かかり藤山の音とは風の音 同
 チューリップつぼめば繁し雨の糸 榎原 稲岡 長
 一片の折れし深紅のチューリップ 同
 これやこの知るも知らぬも蟬丸忌 東京 今井千鶴子
 一望の君がふるさと麦の秋 同

天寿の夏妻を奪はれ子を奪はれ 豊中 瀧 青佳
 四捨五入百寿の夏となりけり 同
 余震にも遭ひつつ見舞来し遅日 金沢 藤浦昭代
 復興の空を大きな鯉のぼり 同
 紫は雨の日にこそ花菖蒲 神戸 三村純也
 背伸びしてみたき年頃サングラス 同
 紫陽花は盛り上がる花や山に彩 熱海 嶋田一歩
 躑躅とは広がる花や山を染め 同
 磊庭の今が盛りのあぢさゐに 福岡 松尾緑富
 磊庭の見事あぢさゐ相俟って 同
 育ちつつ青梅落ちる日々を掃く 姫路 桑田永子
 萩若葉勢ひ春秋巡るかな 同
 形代に書きし俳号罪はなし 神戸 後藤立夫
 初扇披けばはつと匂ひけり 同
 山の色沈めきれざる夏霞 同 長山あや
 太白や新緑沈みゆきし闇 同
 庭に出て母を恋ふるや草を引く 吹田 宮崎 正
 草を取る妻なんとなく落着ける 同

天地有情句評

汀子

桜もう来年が始まつてゐる 東京 稲畑廣太郎

桜の季節が過ぎるともう来年の桜へ心を置くとは桜ならではの

発想。

松が枝も落花とどめてをりにけり 長岡 安原 葉

桜ばかりではなく松が近くにあり花層をとどめている。辺りの

情景が想像できる。

生涯の小城下住まひ春の逝く たつの 浅井青陽子

たつのの城跡にほとりして住んできた歳月を大切に思う作者。

共に齡とる愉しさよ庭若葉 神戸 山田弘子

庭若葉の下で仲間たちとそぞろ歩きながら加齡を語る作者。

葱坊主直立かなしからざるや 熊本 岩岡中正

葱坊主に寄せる詩心とやさしさ。

ホ句涼し一語消ゆれば一語生れ 神戸 後藤比奈夫

作句の過程を楽しむ作者の推敲が想像される。

わが齡には及ばねど大牡丹 徳島 上崎暮潮

大輪の花を競う牡丹の樹齡と作者自身の年齢。作者も花を咲か

せて矍鑠としている。

チューリップつぼめば繁し雨の糸 榎原 稲岡 長

早々と花を閉じ雨に濡れるチューリップには明日がある。

一望の君がふるさと麦の秋 東京 今井千鶴子

熟れて黄色に一望される麦秋の野。特別に郷愁に誘われるのも

君の故郷だからである。(以下略)